

## 第29回日本SPF豚研究会 講演要旨

(於 令和元年7月17日 学士会館)

### 1. 「日本 SPF 豚協会年次報告 平成30年度 (2018)」

日本SPF豚協会 藤田 世秀

平成31年3月末現在のSPF豚認定農場数は190農場(内GGP・GP農場21、一貫生産・繁殖専門農場120、子豚育成専門農場2、肥育専門農場47)であった。認定農場数は6農場(GP2農場、CM4農場)増加し、飼養母豚数は79,656頭と2,052頭(2.6%)増加した。

生産成績をみると、一貫生産農場においては、1母豚当り年間肉豚出荷頭数、農場飼料要求率は横這いだった。農場回転数は低下した。出荷肉豚1頭当りのA分類薬品費は増加した。総合生産指数は1.55ポイント低下した。繁殖専門農場(繁殖-II)では、分娩回数と1母豚当り年間出荷子豚頭数は低下した。1母豚当り年間離乳頭数は横這いだった。出荷子豚1頭当りA分類薬品費は減少した。総合生産指数は横這いだった。肥育専門農場(肥育-II)では、飼料要求率は大幅に悪化した。肉豚出荷率は横這いだった。出荷肉豚1頭当りA分類薬品費は減少した。総合生産指数は4.91ポイント低下した。

### 2. 「アフリカ豚コレラに対する” Preparedness”」

農研機構 動物衛生研究部門 國保 健浩

アフリカ豚コレラ(ASF)は豚およびイノシシが罹患するウイルス性の伝染病で、その極めて高い毒力により養豚農家に壊滅的被害をもたらす。近年はグローバルな人やモノの流れを背景にコーカサス、欧州、中南米、ロシアへと流行域を拡大し、昨年遂に中国でアジア圏初となる発生をみるに至った。有効な予防法・治療法の知られていない本病の対策としては、流行地からの侵入の阻止に加え、自然環境ならびに農場への侵入阻止といった多段階のバイオセキュリティ対策と早期の摘発、淘汰が基本になる。中国に続き本病の発生をみたモンゴル、ベトナム、カンボジアと違い、日本は四方を海に囲まれ、地理的には一見恵まれた環境にあるが、我々が報告したように既に「生きた」ウイルスは我国の水際にまで到達しており、少なくともASFに関する限り、地理的な障壁が物流上の障壁としてはたっていないことが明らかである。このような状況を鑑みると、侵入阻止の「最終ライン」である農場や周辺環境での鋭敏な異状の検知と迅速な通報、そして精確な診断に基づく早期の淘汰が極めて重要であると思われる。

ここでは、ASFの病理を概観するとともに早期診断を可能とする技術やその課題等について紹介し、国内侵入といった不測の事態に対して我々がいましておくべき準備について考察する。

### 3. 「臨床獣医師からみた豚コレラ発生地域の現状と課題」

(有)アークベテリナリーサービス 武田 浩輝

2018年9月9日に国内で26年ぶりに発生した豚コレラは、5月末現在で51農場、3と畜場において98,391頭の豚が殺処分されたにもかかわらず発生が続き、いまだ終息の兆しが見えない状況となっている。今回発生があった豚コレラは、過去に発生があった豚コレラとは異なり、特徴的な症状が非常に少なく、発生農場での疫学調査では感染後2週間以上経過してからようやく症状が現れる例が多く報告されており、その間の他農場への伝搬リスクが非常に高くなっている。また、今回の発生には野生イノシシの関与が非常に高く、野生イノシシでのウイルスの存続と養豚場での発生の続発は、豚コレラ防疫指針の緊急ワクチン実施要件「発生農場における殺および周辺農場の移動制限のみによっては感染拡大の防止が困難と考えられる状況」をすでに超えているにもかかわらず、飼養衛生管理基準の遵守と、早期出荷という方針で、ワクチンを接種しないという見解での対応となっている。野生イノシシの保有するウイルスに脅かされ、経営再開できない中では現実的な案とは言えず、先の見えない状況がこの先も続く可能性が高く、感染の拡大が懸念される状況となっている。

／以上